



Title	トマス・ブッデンブロークとフリードリヒ・ニーチェ：「業績の倫理家」の類型学的考察
Author(s)	別府, 陽子
Citation	独文学報. 2022, 38, p. 51-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103074
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

トマス・ブッデンブロークとフリードリヒ・ニーチェ
「業績の倫理家」の類型学的考察

別府陽子

トマス・マン Thomas Mann (1875-1955) は「ニーチェ小説」(※1)といわれる『ファウストゥス博士』*Doktor Faustus* (1947) 執筆終了後に友人への手紙に次のように書いている。

円環が閉じる。それは50年にわたる時空の遍歴の後の、ドイツの古い都市的なもの、ドイツの音楽的なものへの帰郷であり、「偶然」は、まさにアメリカの『世界青少年名作選集』に収録されている『ブッデンブローク家の人々』*Die Buddenbrooks* (1901) からの1章の重版によって、私が初期の小説を目にするのを望んでいるようだ(※2)。

テクスト

* Mann, Thomas: *Buddenbrooks. Verfall einer Familie*. In: Heftrich, Eckhard (Hg.) u. textkritisch durchgesehen unter Mitarbeit von Stachorski, Stephan u. Lehnert, Herbert: *Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Werke – Briefe – Tagebücher*. Bd. 1. 1. Frankfurt a. M. 2002.『ブッデンブローク家の人々』からの引用は、文中の括弧内にページ数のみを記す。尚、この全集は以下 GKFA と略記し、例えば GKFA 14. 1, 128 と示す。

* Mann, Thomas: *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*. Frankfurt a. M. 1960. (略記: GW)

* Nietzsche, Friedrich: *Die Geburt der Tragödie*. In: Colli, Giorgio u. Montinari, Mazzino (Hg.): *Kritische Studienausgabe*. München 1999. (略記: KSA)

- 1 Mann, Thomas: *Thomas Mann. Teil III: 1944-1955*. Wysling, Hans unter Mitwirkung von Fischer, Marianne (Hg.) In: Hirsch, Rudolf u. Vordtriede, Werner (Hg.): *Dichter über ihre Dichtungen*. Band 14/III. München 1981 (略記: DüD III), S. 121.
- 2 DüD III, S. 116; Vgl. Mann, Thomas: *Die Entstehung des Doktor Faustus. Roman eines Romans*. In: GKFA 19. 1, 420; Vgl. Mann, Thomas: *Thomas Mann Tagebücher 1940-1943*. Mendelssohn, Peter de (Hg.) Frankfurt a. M. 1982, S. 549, S. 975; Vgl. Mann, Thomas: *Thomas Mann Notizbücher 7-14*. Wysling, Hans u. Schmidlin, Yvonne (Hg.) Frankfurt a. M. 1992, S. 107, 121f. マンは『ファウストゥス博士の成立』(1948) に、「古いメモ帳の中に1901年の『ファウスト博士』の3行のプランを見つけた」と書い

マンは、1897年に執筆を開始した『ブッデンブローク家の人々』と『ファウスト博士』の間に密接な関係があると述べているのである。本稿はこの両作品の関係を明らかにすることを目的とする研究の一部として、『ブッデンブローク家の人々』の主人公トーマス・ブッデンブローク(※3)とフリードリヒ・ニーチェ Friedrich Nietzsche (1844-1900) に焦点を当てる。

物語の人物と実在の人物の関係を明らかにするために、前半はマンフレート・ディルクス Manfred Dierks が論ずる類型学的なものの見方に依拠して、「業績の倫理家」がマンの類型学的なものの見方によって生まれたひとつの類型であり、この類型の原型がニーチェであることを論証する(※4)。

後半は外的な事柄である文学的表現とニーチェに関する実際の出来事や思想との関係を考察する。その際にスコット・アボット Scott Abbott が、トーマス・B の最期に受難のイエスが表現されていると論じていることを基にして、トーマス・B とイエス、そしてニーチェの関係を考察する。さらにトーマスが路上に倒れて死に至る場面には、バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750) の『マタイ受難曲』*Matthäuspassion* (1727) の山場であるイエスの磔刑の場面が表現されていることを示す。これらの考察によって、トーマス・B に「磔刑に処せられた者」と署名したニーチェが表現されていることを明らかにする。

1. トーマス・マンの類型的思考

物事を形や性質等によって分類するのは知の基本操作である。ディルクスに

ている。そして『トーマス・マン日記』の1943年3月14日の項には、「古い短編小説の計画『ファウスト博士』について考える。読む物を探す」と書いているが、この記述の注解によれば、この執筆計画は、第7メモ帳に、おそらく1904年秋に書かれ、その後も1933-34年、37年、42年の日記や手紙に繰り返し現れる。『ファウスト博士の成立』は1943年から1946年の日記を基にして書かれているが、副題は「小説の小説」であり、年代や具体的事項は事実と異なる可能性がある。

- 3 トーマス・ブッデンブロークとトーマス・マンの名前が同じであることから生じる誤解を防ぐために、本稿では適宜トーマス・マンはマンとのみ記し、トーマス・ブッデンブロークはトーマス・B と記す。
- 4 トーマス・ブッデンブロークの倫理性については拙論を参照。別府陽子「トーマス・ブッデンブロークの倫理性——ショーベンハウアーの思想に基づいて」、ゲルマニスティネンの会『Flaschenpost』Nr. 43 (2022年)、6-11ページ。

よれば、物事を分類して秩序づける類型化の傾向は、多様な思想や流派が形成され、混沌とした状況が生まれたときに強まる。彼は、トーマス・マンが『ブッデンブローク家の人々』を執筆したのは多様な価値が混在した世紀転換期であり、同時代にたとえばヴィルヘルム・ディルタイ Wilhelm Dilthey の『世界観の類型』*Typen der Weltanschauung* (1894) や、ヴィルヘルム・ヴォーリンガー Wilhelm Worringer の『抽象作用と感情移入』*Abstraktion und Einführung* (1908)、あるいはエミール・クレペリン Emil Kraepelin の『精神病の分類』*Klassifizierung der Geisteskrankheiten* (1883) など、多様な分野に秩序づけの傾向がみられることを示し、さらに類型を次のように定義する。

類型とは、特徴的な現実の一断片を取り出して、精神的に模造する思考の形成物である。類型は、混沌とした諸現象のなかに秩序を形成する。類型は意味連関を作り、それと共に全体性を作り出す。類型の形成は、常に全体性の形成を目指すのである。それゆえ次ることは容易に理解できる。まさに世紀末に——諸連関が崩壊しつつある時代に——諸科学と芸術において、類型学確立のための特別な努力が試みられる(※5)。

ディルクスは全体性の形成を、古典主義の時代とりわけゲーテ Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832) に結びつけて、「全体性とは、有機的なものすべての基本的な状態であり、従って芸術でもある。それは生命力を前提にする」(※6)と論

5 Dierks, Manfred: *Typologisches Denken bei Thomas Mann – mit einem Blick auf C. G. Jung und Max Weber*. In: Heftrich, Eckhard u. Sprecher, Thomas (Hg.): *Thomas Mann Jahrbuch* Bd. 9. Frankfurt a. M. 1996 (略記: Dierks), S. 129.

6 Dierks, S. 135; Vgl. Ruttkowski, Wolfgang: *Typen und Schichten. Zur Einteilung des Menschen und seiner Produkte*. Bern u. München 1978, S. 119f; 高橋義人「形と力——形態学とは何か」、日本独文学会『ドイツ文学』1979卷1号 (1979年)、43-64ページ; 中井章子「自然学と自然科学——ゲーテの場合」、日本独文学会『ドイツ文学』1981卷3号 (1981年)、45-58ページ; 今村仁司『ベンヤミンの〈問い合わせ〉——「目覚め」の歴史哲学』、講談社1995年。高橋義人によれば、ゲーテは、直観によって自然の根本現象に原型 Typus あるいは原形象 Urbild を見出したのであり、「ゲーテの自然科学は古代ギリシアよりもはるか以前にはじまり、ほそぼそとながら今日に至っている具体的の科学の系譜の上にある」(S. 50)。高橋は、ゲーテの形態論はレヴィ=ストロースが未開民族に西洋とは異なる秩序や因果律を見出した構造主義の思想の系

じている。

18世紀、古典主義の時代に、人々は国家と宗教的共同体に所属して、共通の価値観のもとに生きることができたので、孤独や存在の不安を感じることが少なかった。しかし19世紀になると産業革命の進展とともに、合理性や効率性が重視されて、人々は多忙になり共同体的なつながりが薄れた。フランス革命以降広まった自由・平等の思想も従来の階級的・社会秩序や絶対的価値観を崩壊させた。そうした中で繊細で感受性豊かな者は、物事の価値が一定ではないことを敏感に感じ取って確かな抛りどころを失い、不安と孤独のなかで生きる力を喪失する。そうしてデカダンスや神経衰弱に陥りながらも、確かな抛りどころを再び獲得しようとして事物の本質を見抜いて現実を秩序化する。ディルクスによれば、「この秩序づける試みの主な道具が、現実の類型化である」(※7)。類型化は目的ではなく、生命力の充溢と精神の安定によって秩序と全体性を取り戻すための道具である。

ハンス・ヴィスリング Hans Wysling によれば、「抛りどころのなさ」Haltlosigkeit はデカダンスを生むニーチェ以後の時代の病であり、若い頃のトーマス・マンはこの病と格闘した(※8)。抛りどころを喪失して生命力が弱まったマンの自我に、全体性と秩序を求めて事物を類型化する傾向が生じたのであり(※9)、ディルクスは、その類型化の試みの一例が「殿下」の類型であると論ずる(※10)。

譜上にあると考えている。中井章子は「ゲーテの思考は理論と経験のバランスの上に成り立つ」(S. 51)と述べて、西洋近代の抽象的思考と直観的思考の相補的均衡の上にあると見なしている。今村仁司によれば、ベンヤミン自身が自己的根源／根源史の考え方はゲーテの原現象と同じであり、プラトンのイデアとも同質であると語っている。その手法は、さまざまな表現形態からそれらを生み出している根源、原現象を浮かび上がらせる点で、レヴィ＝ストロースの構造主義と共通している(S.221-268)。マンの類型的思考も、イデアの直観と経験的観察のもとに成立しており、その意味ではゲーテの形態論からレヴィ＝ストロースの構造主義、ベンヤミンの「根源」を追求する精神史の系譜上にある。「業績の倫理家」の類型をこのような構造主義の系譜学の枠組みで考えることも可能であるが、紙数の都合上、稿を改めて論じたい。

7 Dierks, S. 132.

8 Wysling, Hans: *Buddenbrooks*. In: *Thomas Mann Handbuch*. Koopmann, Helmut (Hg.) Frankfurt a. M. 1990, S. 369.

9 Vgl. GKFA 21, 91.

10 Dierks, S. 132.

この類型は、マンの幼児期の遊戯「王子様ごっこ」の「カール王子」(※11)に始まり、「小さな没落の王子」(※12)ハノーや、『大公殿下』*Königliche Hoheit* (1909)の「殿下」、『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』*Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull* (1922/1952) (以下『クルル』とする) のヴェノスタ侯爵に至るまで数多く見出せる。この類型の多くは、ハノーを別にして、代表者として多様な経験をした後に幸福な人生を歩むところが共通していることから、「殿下」はマン固有の類型である。ディルクスは、このようなマンの類型は、マックス・ヴェーバー Max Weber (1864-1920) の経験的領域における「理念型」Idealtypus(※13)や、心理分析学者ユング C. G. Jung (1875-1961) の原型に対応していると考えている。そしてさらに以下の『クルル』からの引用文を基にして、この類型を、ショーペンハウア Arthur Schopenhauer (1788-1860) がいうプラトン形而上学のイデアであると論ずる(※14)。マダム・ウプレは愛するクルルに次のように語る。

「信じてくれるかしら、愛しい人、わたしは愛を感じるようになってからというもの、ただあなただけ、いつもあなただけを愛したということを？私が言いたいのは、もちろんあなたではなくて、あなたのイデアをということ、あなたが身をもって示している優美なひと時を愛したということを。[……]昔からあなたたち少年だけを愛してきたわ。[……]そのタイプ(類型)は、少しだけ私と、そして私の年齢と一緒に成長したけれど、でもこのタイプは決して18歳以上にはならなかったわ…」(※15)

マダムがこれまで愛したのは、クルルがこの世で一時的に体現している美少年のイデアであり、「そのタイプ(類型)」は18歳以上にはならない。つまりマダムの考えるイデアと類型は特定の個体ではなく、美少年の性質とそれを体現する人である。それゆえディルクスは、マンの類型をプラトンのイデアであると論ずる。

11 GW XI, S. 328.

12 Ebd., S. 552.

13 Weber, Max: *Die „Objektivität“ sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis*. In: Weber, Max: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*. Tübingen 1922, S. 190.

14 Dierks, S. 132.

15 GKFA 12. 1, 206f.

マンが若い頃から思想を受容しているショーペンハウアーによれば、イデアは個体の本質的性格、すなわち叡知的性格であり、個々の人間にそれぞれのイデアがある。そのイデアを把握するのは芸術家の直観である。マンは芸術家の直観で人間の本質的性格を見抜いているのであり、そうして生まれたのが「殿下」の類型や、次節で述べる「業績の倫理家」の類型である。

2. 「業績の倫理家」類型

トーマス・マンは『非政治的人間の考察』*Betrachtungen eines Unpolitischen* (1918)においてトーマス・Bを「業績の倫理家」と名づけて次のように説明している。

私が、私の時代の何事かに共感したとするならば、それはある種の英雄性であり、過重な荷を担い、過剰に訓練されて、疲労して限界に至ってもまだ働いている業績の倫理家という、現代の英雄的な生の形式であり、態度である(※16)。

「業績の倫理家」は生の形式であるから、イデア、すなわち類型である。マンは、この「業績の倫理家」の類型を、『フィオレンツァ』*Fiorenza* (1905) のサヴォナローラ、『大公殿下』、『ヴェニスに死す』*Der Tod in Venedig* (1912) のアッシェンバハ等に用いたと語っている(※17)。

『ヴェニスに死す』の主人公アッシェンバハは、若くして世に認められた作家である。モットーは「頑張り抜くこと」*Durchhalten*(※18)で、懸命に努力して創作した作品は多くの人に支持されて、50歳で貴族に叙せられる。アッシェンバハの作品の主人公もまた「業績の倫理家」であり、『ヴェニスに死す』の中で次の

16 GKFA 13. 1, 158f.

17 GKFA 13. 1, 158f.; Vgl. GKFA 21. 2, 264. この表現はアッシェンバハだけを指すのではない。マンは1908年12月7日付の兄ハインリヒ・マンへの手紙に、マン自身とホーフマンスターントについて、「まさに最良の人々すべてが疲労の極みで仕事をしているというのは注目に値する」(GKFA 21, 400)と書いている。

18 GKFA 2. 1, 590.

ように特徴が語られている。

グスタフ・アッセンバハは、疲労の極みにありながら働いているすべての人々、過重な荷を担う人々、すでに疲労困憊している人々、それでもなお穏然としている人々を描く詩人であり、生まれつき虚弱で資力に乏しく、恍惚たる意志と賢明な管理によって少なくともしばらくの間は偉大さの作用を獲得しているような、業績を目指すこれらすべての倫理家たちを描く詩人であった(※19)。

アッセンバハの描く「業績の倫理家」の特徴は、身体的に虚弱でありながら、意志の力で禁欲的に努力して偉大なものを獲得する人々であり、「疲労の極みにありながら働いている人々、過重な荷を担う人々」である。この表現と、『非政治的人間の考察』の「過重な荷を担い、過剰に訓練されて、疲労して限界に至ってもまだ働いている」に共通するのは、当人にとって過重な負担であるにもかかわらず、疲労して身体の限界に至りながらもなお働いていることである。これと同様の表現が、『われわれの経験に照らしたニーチェ哲学』*Nietzsches Philosophie im Lichte unserer Erfahrung* (1947) (=『ニーチェ哲学』) にある。

それ〔マンの畏敬と憐憫の混ざり合った感情〕は、知るという使命を与えられながらも本来はそのために生まれたのではない、過大な荷を負わされ、過剰な課題を与えられたひとつの魂に対する悲劇的な同情の感情である。ハムレットのように、優しく、繊細で、善良で、愛情に飢え、高貴な友情なしではやっていけない、孤独には到底向かない魂に対する同情である(※20)。

マンはニーチェについて、「優しく、繊細で、[……] 孤独には到底向かない魂」でありながら、「過大な荷を負わされ、過剰な課題を与えられて」、孤独のなかで思索し、後世に大きな影響を与える業績を残したと述べている。つまりマンにとってニーチェこそが実在した「業績の倫理家」である。

19 Ebd., 512.

20 GKFA 19. 1, 186.

トマス・Bのモデルがマンの父親であることはすでに知られている。しかしマンは『非政治的人間の考察』で、「悲劇的倫理的ニーチェ体験はわたしの市民的な業績の倫理家体験にまで影響していたと私は見ている」(※21)と述べて、トマス・Bに付与されている「業績の倫理家」は、マン自身のニーチェ受容体験の影響によって名づけられたことを明らかにしている。

世紀転換期の「ニーチェ熱」が大流行した時代、つまり「一種の消耗性の力の賛美、『美』の崇拜を生み出していた時代」(※22)に、多くの芸術家はニーチェから強い影響を受けて、それを自己の作品に表現した。マンもニーチェから影響を受けたが、しかしマンの場合は多くの人々とは異なりニーチェを倫理家と認識していた(※23)。マンはゾンバルトの『ブルジョワ』を例にして次のように語っている。

「カルヴィニズム、市民性、英雄精神」という心理学的系列についてのわれわれの一一致は、かなり高い、いやきわめて高い精神的媒体、すなわちニーチェを介して見られるものらしい。というのも、時代のあらゆる精神的体験にその隅々にいたるまで影響を及ぼし、かつて例のないほど新しく現代的な形で英雄的な体験となったニーチェという時代体験がなければ、確かにこの社会科学者もそのプロテスタンクト的英雄についての命題を思いつくことはなかつたろうし、小説家である私もその「主人公」の形象を、実際に見たとおりには見ることはできなかつたろう、と思われるからだ(※24)。

マンにとってニーチェを知ったことは「新しく現代的な形の英雄的な体験」であり、「時代体験」である。「体験」とは心に強く刻み込まれて、その後の思考や行動に影響を与える経験である。英雄は、古代にはヘラクレスやプロメテウスのように、優れた能力を具えた人間や半神が、自己を顧みることなく人々のために働いて悲劇的結末を迎えるのが通例である。しかし現代の英雄は「虚弱の英雄」(※25)、すなわち、ニーチェが弱視や頭痛にもかかわらず限界に至ってもなお

21 GKFA 13. 1, 161.

22 Ebd., 160.

23 Ebd.

24 Ebd., 159f.

25 GKFA 2. 1, 512.

思索と執筆を続けて発狂という悲劇的結末を迎えたように、虚弱にもかかわらず過剰に働く人間である。

ゾンバルトはニーチェを知る体験を経て、それまでよりも事物を深く洞察できるようになった。マンも同様にニーチェの生涯と業績を知る体験を経て、自作の「主人公」であるトーマス・Bを、「実際に見た通り」以上に見ることができるようになった。つまり、トーマス・Bのモデルである父親に対するマンの見方が変化したのである。マンはそれまで父親を勤勉な商人という表面的な見方しかしていなかった。しかし父親がゾラを読むような本質的に文学を愛する人間でありながら(※26)、それを抑制して、商人として業績を上げる努力をしていること、ニーチェと同じように、自己の限界に至っても働く「業績の倫理家」であることに気づいた。その結果生まれたのがトーマス・Bである(※27)。それゆえマンが『非政治的人間の考察』に書いている「市民的な業績の倫理家体験」とは、架空の人物トーマス・Bではなく、実在したマンの父親に関する体験と解釈すべきである。「業績の倫理家」の原型はニーチェであり、マンはその原型を認識することで父親に対する見方が変化した。そして主人公のトーマス・Bを創作することができたのである。

自伝エッセイ『自分のこと』*On Myself*(1940)によれば、マンは創作のために自分から素材を探し求めるのではなく、受動的に無意識に攝取したものを、自己的の内部でさまざまな人間の特徴や特性の在庫として所蔵し、創作する際にその在庫から素材を取り出す。そして例えば、『ヴェニスに死す』のアッセンバハのように、「ある原型の特徴がまったく別の典拠からの提起とまじりあい、幾重

26 Vgl. GW XI, S. 536. 父親が「金縁の鼻眼鏡をかけてフランス語の本、ゾラの小説、つまり『ナナ』を読んでいたことを私は覚えている」と記されている。

27 Vgl. Blödern, Andreas u. Marx, Friedhelm (Hg.): *Thomas Mann Handbuch. Leben – Werk – Wirkung*. Stuttgart 2015, S. 1. マンの父親は100年続いた穀物商会の社主で、29歳で市参事会員に選ばれて国家の大蔵大臣に相当する自由都市リューベックの税務担当者になる。; Vgl. Mendelssohn, Peter de: *Der Zauberer. Das Leben des deutschen Schriftstellers. Thomas Mann*. 1. 1875-1918. Frankfurt a. M. 1975, S. 62. マンの記憶にある父親は、威厳があり、思慮深く、誇りをもって勤勉に働き、人間的にも精神的にも洗練されている。文学的教養や歴史知識があり、善良で、社交的ユーモアがあるが決して単純でも粗野でもない、神経質で我慢強く、自制心のある、早期に社会的な声望と名誉を得た人物である。

にも交錯し合い、その最後の結果として融合して芸術的な統一に達する」(※28)と説明している。

この言葉を「業績の倫理家」の類型に当てはめるならば、受動的に無意識に撰取したものは、「業績の倫理家」であるニーチェやマンの父親の特徴や特性であり、その在庫に別の典拠が混じってアッセンバハが生まれたことになる。マンは「業績の倫理家」の原型に別の性質や特徴を加えて類型的人物を創作した。したがってトーマス・Bは、マンの父親像を加味したニーチェという原型の一類型である。

3. ショーベンハウアーの著作の読書体験

次に外的事象と表現の面から、トーマス・ブッデンブロークとニーチェの関係を考察する。

トーマス・Bは、倫理的義務感から生來の内省的性質を自制して業績のために働くが、ペベンラーデの麦の先物取引に失敗すると心身ともに疲労が増して、自制していた内省が再び始まる。彼は死を予感するが、死とはどのようなものか知らないために不安になる。ある日、たまたま何年も前に購入してあった哲学書を手にすると、その中の一章「死および、死と我々の本質の不壊性との関係について」(722) (※29)に惹かれて時間を忘れて読みふける。そしてその夜ショーベンハウアーが美的体験というイデアの観照をする。

このトーマス・Bの体験は元々作者マン自身の体験である(※30)。マンの場合は、「読めと命ずる時が来た、そしてわたしはこのように読むことは一度しかないだろうと思えるほど、昼夜分かたず読んだ」(※31)。その読書体験は、「形而上

28 GW XIII, S. 154.

29 『Über den Tod und sein Verhältnis zur Unzerstörbarkeit unseres Wesens an sich』は『意志と表象としての世界』続篇の第41章である。正編の各章に見出しあはない。

30 Vgl. GW XI, S. 111.

31 GKFA 1, 2, 53; GW XI, S. 111. ニーチェのこのエピソードが最初に収録されたのはニーチェの妹 Elisabeth Fölscher-Nietzsche が編集した *Das Leben Friedrich Nietzsche's* である。Bd. 1 は 1895 年、Bd. 2 は 1897 年に出版されており、当時のトーマス・マンのニーチェへの関心の高さから、出版時に読んだと考えてよいだろう。

学的魔酒によって20歳の青年が覚えた陶酔」(※32)であった。このようなマンの読書体験とニーチェの読書体験の類似性を、ヘフトリッヒが新全集の注釈版で指摘している(※33)。

ニーチェは、自伝によれば、ライプツィヒ大学時代に書店で本を手に取ると、「この本を持って家に帰れ」(※34)とデーモンがささやいた。いつもはすぐに書籍を購入したりしないが、このときはその場で購入して帰り、ソファの隅に座って読みふけた。そして2週間のあいだこの書物のこと以外は考えられず、大きな内面的変革を体験した(※35)。

ニーチェとマンは、何者かに命じられるようにしてこの書物を手に取って読みふけり、内面的な変化を体験する。両者ともに、自分の明確な意志で本を手に取るのではないにもかかわらず没頭して読むという経緯も共通しており、その点ではトーマス・Bも同じである。つまり、マンの体験を表現したトーマス・Bの読書体験とニーチェの読書体験は、同一類型の類似した体験ということになる。

このような読書体験は、同じ「業績の倫理家」類型のアッセンバハや他の作品の人物には見られない。それゆえニーチェとトーマス・Bの二者の間に特別な関係があることが推察されるのである。

4. トーマス・ブッデンブロークの死とニーチェの思考の渦巻

1875年1月、トーマス・Bは歯の痛みのために市参事会を中途退席して歯科医院に行き、治療を終えて帰宅する途中に路上で、次のような特異な形で昏倒する。

およそ車道の中ほどに至ったとき、トーマス・Bに以下のことが起こった。それはまるで、脳髄が掴まれ、抵抗しがたい力によって次第に加速する、おそらく加速する速度で、大きな円から次第に小さくなる、ますます小さくなる同心円を描いて回転させられ、最後は乱暴で容赦のない烈しい勢いでこ

32 GW IX, S. 561.

33 Vgl. GKFA 1. 2, 53.

34 Nietzsche, Friedrich: *Autobiographisches aus den Jahren 1856-1869*. In: Karl Schlechta (Hg.): *Friedrich Nietzsche Werke in drei Bänden*. III. München 1956, S. 133.

35 Ebd.

の同心円の石のように硬い中心点に叩きつけられたかのようだった……トマス・ブッデンブロークは身体を半回転させて、両腕を伸ばして濡れた石畳の上にうつ伏せに倒れた。

この通りは急な坂道だったので、彼の上半身は足よりもかなり低い位置にあった。うつ伏せに倒れた顔の下にすぐに血だまりが拡がりはじめた。帽子は車道を少し下のほうへ転がって行った。毛皮の外套には汚泥と雪解け水が飛び散っていた。白いヤギ皮の手袋をはめた両手は、ぐっと伸びて水たまりに漬かっていた。(749f.)

トマス・Bの路上での昏倒と死は1月の出来事である。一方ニーチェも同じ1月、つまり1889年1月3日にトリノのカルロ・アルベルト広場で馬の首に抱きついて昏倒し、その後精神の闇に閉ざされる。当時はこのときの昏倒が発狂の原因とみなされた(※36)。マンの『ニーチェ哲学』の冒頭の一文、「トリノとバーゼルから、ニーチェの精神崩壊の知らせが広まった」(※37)は、当時ニーチェの発狂が広く知られた出来事であることを示している。

トマス・Bの場合、渦巻に巻き込まれて昏倒する様子が、「大きな円から次第に小さくなる、ますます小さくなる同心円を描いて回転させられる」と、具体的に描かれている。一方ニーチェは『悲劇の誕生』*Die Geburt der Tragödie* (1972)において、「ソクラテスのうちにいわゆる世界史のひとつの転換点と渦巻を見ざるをえない」(※38)と述べて、理論的人間ソクラテスに科学的思考の始まりがあり、それは終わりのない理論の渦巻であると論じている。『悲劇の誕生』執筆時のニーチェは、形而上学的観点からソクラテスのように理論に裏付けを求める考え方を、生命力が弱い印であると批判した。そして矛盾に満ちて理論的に説明で

36 Vgl. Verrecchia, Anacleto: *Zarathustras Ende. Die Katastrophe Nietzsches in Turin*. (Aus. Ital. übertr. von Pawlowsky, Peter) Wien, Köln u. Graz 1986, S. 241-272. ニーチェがトリノで馬の首に抱きついて狂気の症状を示した出来事を知らせる新聞や雑誌の記事が少しずつ異なっていることや、ニーチェがそれ以前から狂気の徴候を示していたこと、妹のエリーザベトと友人のオーヴァーベック、ベルヌリがニーチェの名誉を考えて、広場で昏倒したことを発狂の原因にしたこと等が記されている。Vgl. GKFA 19. 2, 237. ニーチェは「トリノの路上で倒れた」と記されている。

37 GKFA 19. 1, 185.

38 KSA 1, S. 100.

きないギリシア悲劇のような芸術こそが人間に生きる意欲を与えると考えた。このようなニーチェの理論と科学的思考批判に対して、マンは、「ニーチェは生涯『理論的人間』を呪い続けたが、彼自身まさに言葉の眞の意味で正真正銘の理論的人間である」(※39)と述べて、ニーチェ自身がソクラテス的な論理の渦巻に巻き込まれているという見方を示す。

ニーチェは初期には『悲劇の誕生』でアポロン的なものとディオニュソス的なものを論じて形而上学を肯定していたが、中期になると「形而上学の欺瞞を捨て、身近な事がらを吟味し直す冷静な観察の態度を繰り返し強調する」(※40)。そして感覚や心理的な事柄も言葉と論理で説明しようとする。しかし後期には再びアポロン的なものとディオニュソス的なものを芸術衝動と捉えて形而上学を肯定するようになる(※41)。ニーチェの力への意志や永遠回帰の思想も形而上学的思惟と見なされることもあり(※42)、形而上学のみを見ても、ニーチェ自身が終わりのない思考の渦巻に巻き込まれているのである。発狂前の『ヴァーグナーの場合』*Der Fall Wagner* (1888) では過激なヴァーグナー批判を抑えることができない。ニーチェの思考の渦巻は次第に加速して行き、限界を突破して狂気に至るのである。牧師の息子であるニーチェは、倫理的性質から思想上の業績のために限界に至っても考え続けたのであり、その結果迎える悲劇的結末は「業績の倫理家」の宿命である。マンはこのようなニーチェの思考の渦巻を、路上に昏倒する同一類型のトーマス・Bに表現した。

トーマス・Bの渦巻は、詩人的内省と市民倫理に基礎を置く商人の実際性の対立から生れる迷いと苦悩の渦巻である。社主と市参事会員の立場にある彼にとって「体面を保つことは第一義のことである」(343) から、常に完璧を目指して身なりを整え、疲労困憊してもなお気を張り詰めて働き続ける。しかし路上に昏倒して、美しい衣服は頭から流れ出した血と雪解け水や馬糞の混じる汚泥に汚れてしまう。夫の日々の努力を知る妻のゲルダは、「これまで糸くず一本すらつい

39 GKFA 19. 1, 223.

40 渡邊二郎「中期の思想」、(渡邊二郎、西尾幹二編)『ニーチェを知る事典』、筑摩書房 2013年、154ページ。

41 Vgl. KSA 13, S. 235.

42 菅野孝彦「ニーチェの形而上学批判」、筑波大学倫理学原論研究会『倫理学』第2号(1984年)、97-98ページを参照。

ているところをみせたことがないのに、最後にこんなことになるなんて、嘲笑されてるのよ、侮辱だわ ein Hohn und eine Niedertracht...!」(751) とようやく言葉を発して、夫の身になって、夫に与えられた運命を嘆く。次節でも論じるが、Hohn の本来の意味は嘲笑であり、体面を重んずるトーマス・B にとって、嘲笑されることは大きな屈辱である。ゲルダの嘆きの言葉の後に、「くしゃくしゃになったひげの下で言葉にならぬまま唇が動き、ときおり喉からゴロゴロいう音がもれた」(751) と続く。

ゲルダの嘆きと瀕死のトーマスの描写は、『ニーチェ哲学』の「ああ、なんと高貴な精神がここに破壊されてしまったのか！」あるいは、「そのような高みに上げられた理性が、熱狂により台なしにされた、[……] 今は壊れた鐘のように調子外れの音を出している」(*43)に対応する。マンは1947年にニーチェを表現する際に、50年近く前に書いたトーマス・B の最期をなぞるような書き方をしているのである。マンはニーチェを「業績の倫理家」と見なしており、その類型であるトーマス・B が路上で倒れる場面を、論理の渦巻きに巻き込まれたニーチェを想いながら描いた。『ニーチェ哲学』の上記の表現は、そのときの記憶が基になっているのであろう。渦巻と路上に昏倒する悲劇的結末はトーマス・B とニーチェにのみ共通しており、『意志と表象としての世界』の読書体験と同様に、両者に「業績の倫理家」の類型以上に特別な関係があることを示している。

5. イエスの表象

アボットは、第10部第7章のトーマス・B を受難のイエスのひとつの表象（模像）prefiguration とみなして以下の事柄を論じている(*44)。第7章の数字の7はキリスト教の聖数であり(*45)、歯科医院でトーマスが飲む「クロロフォルムの味と匂いがする水」(746) は、「マタイによる福音書」の「十字架上のイエスに与

43 GKFA 19. 1, 185.

44 Vgl. Abott, Scott: *The Artist as figurative Jesus in Thomas Manns Buddenbrooks*. In: Brigham Young University: *Perspective. A Journal of Critical Inquiry*. Provo 1976 (略記: Abbott), S. 85-94.

45 Vgl. Forster, Dorothea: *Die Welt der Christlichen Symbole*. Innsbruck, Wien u. München 1977, S. 52f.

えられた酢」(※46) (27:48) に対応し、トマス・B が座る治療用の椅子は彼の十字架である。トマス・B が治療中に我慢しながら思う「これでおわりだ！（神の命するままに！）Gott befohlen!」(747) は、「ルカによる福音書」(23:46) の「父よ、わたしの靈を御手に委ねます！」Vater, ich befehle meinen Geist in deine Hände! に対応し(※47)、倒れたトマス・B の両腕を広げた姿は十字架上のイエスの姿に対応する。歯科医は彼の傷んだ歯の歯冠 Krone だけを折り取るが (Vgl. 748)、この出来事は、十字架上のイエスの頭上に冠のように貼られた罪状「ユダヤ人の王イエス」(※48) にパロディ的に対応する。アボットが主張するように、トマス・B に十字架上のイエスを読み取ることができる。

マンは『非政治的人間の考察』に、ニーチェが1868年頃バーゼルで復活祭前の受難週に『マタイ受難曲』を3度聴いたエピソードを紹介している(※49)。一般に毎年この時期に演奏されるのはバッハ作曲の『マタイ受難曲』であるから、ニーチェが3度聞いたのもバッハのものと考えてよいだろう。「マタイによる福音書」だけでなく、この楽曲の第54番コラールと、路上に昏倒したトマスの描写にも次のように対応関係が見出される。

バッハのカンタータや受難曲の台本の多くはピカンダー、本名クリスティアン・フリー・ドリヒ・ヘンリーツィ Christian Friedrich Henrici (1700-1764) のものであるが、『マタイ受難曲』の第54番コラールのイエス磔刑の場面は、世界で最も優れた讃美歌作者といわれる牧師で詩人のパウル・ゲールハルト Paul Gerhardt (1607-1676) によるコラール「血汐したたる」O Haupt voll Blut und Wunden が用いられている(※50)。このコラールはラテン語の詩を、ゲールハルトがドイツ語に訳したもので、大塚野百合は「この歌はバッハ特愛の歌」(※51)で、

46 Abott, S. 90. ここはむしろ「マタイによる福音書」(27:34) の磔刑の前に与えられた「にがみを混ぜたぶどう酒（酢）」のほうが適切と思われる。

47 Gott befohlen! は「さようなら」の古い言い方であり、トマス・マン全集（新潮社）の森川俊夫訳「これでおさらばだ！」で物語の筋が通る。アボットの指摘は原義に基づくもので、マンは両方を含意していると思われる。

48 *Die Bibel, Einheitsübersetzung. Altes und Neues Testament*. Stuttgart 2013, S. 1120. (Mathäus 27:37)

49 GKFA 13. 1, 161.

50 轉田収「パウル・ゲールハルト」Paul Gerhardt (1607-1676) :『世界大百科事典9』平凡社 2011年、18ページを参照。「ルターに次ぐドイツの讃美歌詩人」と記されている。

『マタイ受難曲』の五つの節で用いられていると述べて、磯山雅も「『マタイ受難曲』のシンボルとも言うべき存在」(※52)と記す非常に有名なコラールである。

Nr. 54 Choral(※53)

○ Haupt voll Blut und Wunden,
Voll Schmerz und voller Hohn,
○ Haupt, zu Spott gebunden
Mit einer Dornenkron,
○ Haupt, sonst schön geziert
Mit höchster Ehr und Zier,
Jetzt aber hoch schimpfieret,
Gegrüßet seist du mir!

おお、血にまみれ傷ついた御頭よ、
苦痛と嘲りの満つる御頭よ、
おお御頭よ、愚弄するための
いばらの冠で縛られた、
おお御頭よ、常ならば至高の栄誉と飾りで
美しく装われるのに、
今はひどく辱められている、
わたしの心からの挨拶をお受けください！

Du edles Angesichte,
Dafür sonst schrickt und scheut
Das große Weltgewichte,
Wie bist du so bespeit,
Wie bist du so erbleichtet!
Wer hat dein Augenlicht,
Dem sonst kein Licht nicht gleichet,
So schändlich zugericht?(※54)

主よ、気高きかんばせよ、
常ならば偉大な世の権威も
畏れてしりぞくのに、
あなたはかくも唾を吐かれ、
かくも青ざめている！
あなたの眼の輝きは、
常ならばいかなる光も及ばぬのに、
誰がこれほど酷く痛めつけたのです？

律法を守ることを厳格に要求するユダヤ教と違い、「隣人を自分のように愛せ」(マタイ 22:39)と、愛と許しを教えるイエスに多くの人々が従い始めると、権威主義化したユダヤ教の祭司や長老は自分たちの地位が危うくなると感じて、イエスを迫害して捕らえさせ、十字架の刑に処す。

コラールによれば、「気高き」イエスの「血にまみれ傷ついた御頭」は、「常な

51 大塚野百合『贊美歌・聖歌ものがたり——疲れしころをなぐさむる愛よ』、創元社 1995年、169ページ：贊美歌136番「血汐したたる」の原作者はクレルヴォーのペルナール(1091-1153)又は、ルーヴィアンのアールフルフといわれており、ゲールハルトがドイツ語に訳して1656年に発表した。

52 磯山雅『マタイ受難曲』、筑摩書房 2019年、141ページ。

53 同上.422-424ページの歌詞を使用し、各節の文頭及び第2節の6行目のWerを大文字に変更した。

54 井形ちづる、吉村恒『宗教音楽対訳集成』、国書刊行会 2007年、245ページ以下。

らば至高の栄誉と飾りで美しく装われている」はずであるが、「嘲られて」Hohn、愚弄されて、「唾を吐かれ」、「いばらの冠で縛られる」。「常ならばいかなる光も及ばぬ」目の輝きも酷く痛めつけられる。

一方トーマス・Bは伝統ある商会の社主で、市参事会員としては「市長の右腕」(512f.)といわれるほど有能であり、常に最新流行の衣服を着用し、日常会話でもハイネの詩を引用するような高い教養と貴族性を感じさせる。つまり「至高の栄誉と飾り」があり、「世の権威」も一目置く人物である。しかし妻と少尉の音楽の楽しみが醜聞になると、世間の人々はトーマスを妻に欺かれた夫とみて、滑稽に思い(vgl.711)、トーマス・Bを「嘲る」のである。そして路上にうつ伏せに昏倒して血を流したトーマス・Bの頭部の「血のついた包帯」(751)は、イエスの「いばらの冠」に相当し、イエスの痛めつけられて輝きを失った目は、トーマスの「半ば開いた目は、濁って白目をむき出している」(751)に対応する。

前節で引用したゲルダの嘆きの言葉と「血汐したたる」には共に、侮辱する言葉「嘲笑」Hohnが用いられており、「血汐したたる」のふたつの詩節の最後の行「私の心からの挨拶をお受けください」と「誰がこれほど酷く傷めつけたのです」には、ゲルダの言葉と同様に傷めつけられた者へのいたわりが表現されている。トーマス・Bの描写だけでなく、ゲルダの言葉もコラールに対応しているのである。さらに、十字架上のイエスに暴言を吐いて石を投げる人々に対応するのがトーマス・Bやゲルダの噂をして嘲笑する世間の人々である。

これらの対応関係を示唆しているのが、パウル・ゲールハルトの直系の子孫を自称する双子の老嬢である。ふたりは領事夫人主催のエルサレムの夕べの参加者で、18世紀の羊飼いの帽子を被り、色褪せた服を着て、貧しい人々に施しをする。そして死を目前にして恐怖におののく領事夫人を見舞うと、夫人の生への執着を消し去り、あの世に送り出す葬儀に参列する。先祖のパウル・ゲールハルトはコラールでトーマス・Bを看取り、子孫の老姉妹は領事夫人を看取る役割を担うと解釈することも可能である。双子の老嬢の存在と3度『マタイ受難曲』を聞いたニーチェの逸話は、『マタイ受難曲』とトーマス・Bの関係を暗に示しており、アボットの主張を裏付けている。

イエスは隣人愛を説いて、厳格なユダヤ教の教えを革新し、ニーチェも、ショーペンハウバーの思想のペシミズムと生の否定を生の肯定へと180度転回させた。イエスとニーチェは共に学び取ったことを大きく変える革新的な思想家で

あり、共に使命を全うするために、疲労の極限まで努力して悲劇的結末を迎えた「業績の倫理家」である。

一方トーマス・Bはイエスのような聖人ではなく、ひとりの商人であり、哲学書の内容も美的観照の体験も翌朝にはすべて忘れる。彼は、伝統を守り、祖父や父親を手本にして18世紀的な市民階級の倫理を受け継ぎ、祖父のように素朴に利益獲得を目指す実際的な商人でありたいと願っているのであり、革新的な実業家になることを目指していない。自由と平等の意味も教養として理解するが、感覚的に受け入れることができず、市参事会員に小売商人の息子が選ばれたことを不快に感じる。それゆえトーマス・Bは、イエスとニーチェがパロディ化された「業績の倫理家」の同一類型とみなすべきである。

6. 十字架に磔けられた者

ニーチェはキリスト教を、生を否定するものとして批判したが、イエスを批判したわけではない。『反キリスト者』*Antichrist* (1888) のアフォリズム32でニーチェは「救世主の類型のうちに狂信家を持ち込むことなどしない」(※55)と、イエスをひとつの類型と見る言葉で始めて、次のように記す。

幾らか寛大に表現するならば、イエスをひとつの「自由な精神」と名づけうるだろう——イエスは固定したものすべてを全く認めない。言葉は殺す、固定したすべてのものを殺す。イエスだけが知っているように、経験という「生」の概念は、イエスにおいては、あらゆる種類の言葉、定式、法則、信仰、教義に反する。彼は最も内的なものについてのみ語る。「生命」ないし「真理」ないし「光」は、この最も内なるものを表す彼の言葉であり、——その他すべてのもの、全実在性、全自然、言葉それ自体は、彼にとっては単なる記号の、比喩の価値しか持たない(※56)。

ニーチェはイエスを「自由な精神」というが、ニーチェ自身が「自由な精神」である。彼は大学教授の職を辞して以降、定住せず、イタリア、スイス、南仏を自由

55 KSA 6, S. 203.

56 Ebd., S. 204.

に往来する生活を送った。精神的にも、宗教、伝統、理性、自由平等という民主主義の理念などの特定の価値に捉われず、自由に思考した(※57)。そして言葉についても、「道徳外の意味における真理と虚偽について」*Über Wahrheit und Lüge im aussermoralischen Sinne* (1873) に、「あらゆる概念は等しくないものの等置によって成立する」(※58)と記して、言葉は隠喩であり、対象を象徴的に固定化するとみなして言葉に完全な信頼を置かず、「生」を重視して贊美した。上記引用文のイエスをニーチェに置き換えると全く矛盾がなく、マンがニーチェの「十字架に磔られた者」という署名を、「馬鹿げた無意味の署名と思うべきではない」(※59)というのは妥当なことと思われる。

ニーチェはイエスの運命を自己の運命に重ねており、マンはそれを受容してイエスとニーチェを同一類型とみなした。そしてトーマス・Bの最期に、『マタイ福音書』と「血汎したたる」を転用した。なぜならマンはトーマス・Bにニーチェを表現したかったからである(※60)。

7. トーマス・マンの「ニーチェ熱」

初期の短編『幸福への意志』*Der Wille zum Glück* (1896) が、ニーチェの思想「権力への意志」を模したタイトルであるように、マンは早くから、ニーチェの思想を自分なりに受容して作品を執筆している。しかし「ニーチェ熱」といわれるニーチェの力と美の思想が大流行した時代に、マンはニーチェを倫理家と理解していたと述べており(※61)、マン自身は「ニーチェ熱」に感染せず、冷静であったようにみえる。しかしリューベック時代の友人オットー・グラウトフへの手紙からは、マンのニーチェへの強い関心が読み取れる。

「ケルン新聞」の編集委員だったオットーの兄フェルディナントは、1897年

57 大石紀一郎「自由精神と理性批判」、大石紀一郎他編『ニーチェ事典』、弘文堂 1995 年、253-259 ページを参照。

58 KSA 1, S. 880.

59 GKFA 13. 1, 161.

60 『反キリスト者』のアフォリズム 32 の「救世主の類型」からトーマス・マンがヒントを得て、救世主の類型に「業績の倫理家」の類型を持ち込んだと考えることも可能であるが、ここでは論じない。

61 Vgl. GKFA 13. 1, 160.

の7月21日付の文芸欄で、ヴィルヘルミ J. H. Wilhelm の『カーライルとニーチエ』*Th. Carlyle und F. Nietzsche. Wie sie Gott suchten, und was für einen Gott sie fanden* (1897) の書評をしている。フェルディナントは、まず、著者がカーライルとニーチエの共通点と相違点を明確にしていることを評価する。しかし著者が、ニーチエがキリスト教から離反して「最終的に独自のとんでもないもの、とんでもなく誇張したイメージを神に見立てた」ことをニーチエ発狂の原因とみなしていることを批判する。そして結論として、「とりわけ残念なのは、ニーチエの思想を、完成された生の思想ではなく未完成の発展段階にすぎない、とは考えないので大言壯語する人々を擁護している点である」(※62)と述べて、ニーチエの思想を自分なりに理解した上で批評している。この書評でフェルディナントは、「個々の判断と表現方法における類似」*Parallelen in Einzel-Urteilen und in der Ausdrucksweise*(※63)という言葉を用いている。

同じ7月21日付のマンのオットーへの手紙を読むと、マンはフェルディナントの文体やセンスを評価していないが、「だがフェルディナントはニーチエについて」ひとつの判断 « を持っているんだ！ 敬意を表します！」(※64)と賞賛して、フェルディナントと同じ語彙 *Urteil* をカッコつきで強調して用いている。手紙は新聞と同じ日付であることから、マンがこの記事を読んで手紙を書いたことは確実であろう。この時期マンはローマにいたので、7月21日に新聞を入手できたかどうか不明で、マンが新聞の日付に合わせて手紙に7月21日と記した可能性もある。この手紙の「！」を繰り返す熱意を感じさせる文体は、マンが『ブッデンブローク家の人々』執筆前に、理解の仕方と程度に違いはあるにせよ「ニーチエ熱」に感染していたことを示している。

「ニーチエ熱」に感染した多くの詩人や作家たちは、とりわけ『ツアラツストラはこう語った』*Also sprach Zarathustra* (1885) の影響を受けて、力と美を贅美した作品を多く創作したが(※65)、マン自身はニーチエを倫理家と理解していた。それならばマンが作家として自己のニーチエ像、すなわち倫理家としてのニーチエ

62 Zeit. punkt NRW. *Kölnische Zeitung* 1897.7.21, Nr. 667. Literarisches の記事。<https://zeitpunkt.nrw/ulbbn/periodical/zoom/12013119?query=Nietzsche> Zeit. punkt NRW. ノルトライン・ヴェストファーレン州の新聞雑誌記事データベース。

63 Ebd.

64 GKFA 21, 94.

を表現しようとしたとしても不思議はない。マンは『ブッデンブローク家の人々』執筆前に「ハノーの小説」を構想していたが、フィッシャー社からの長編小説執筆の勧めで、生家をモデルにした作品にすることを決意した。そして、ニーチェを原型とする「業績の倫理家」の一類型と見なすようになっていた父親を、トーマス・Bに描いた。マンがトーマス・Bに表現したのはニーチェその人である。

『ブッデンブローク家の人々』と『ファウストゥス博士』の円環は、ニーチェがモデルの小説、すなわち「ニーチェ小説」で結ばれているのである。

(べっぷ・ようこ 大阪大谷大学非常勤講師)

65 Vgl. Hillebrand, Bruno: *Frühe Nietzsche-Rezeption in Deutschland*. In: Hillebrand, Bruno (Hg.): *Nietzsche und die deutsche Literatur. Bd. 1. Texte zur Nietzsche-Rezeption 1873-1963*. Tübingen 1978, S. 2ff. ヒレブランドはニーチェの影響を受けた作家や詩人の209点もの作品を紹介している。

Thomas Buddenbrook und Friedrich Nietzsche: Eine typologische Untersuchung des ‚Leistungsethikers‘

Yoko BEPPU

Nach der Vollendung vom *Doktor Faustus* schrieb Thomas Mann „der Ring schließt sich“ und deutet er damit an, dass der *Doktor Faustus* eine enge Beziehung zu den *Buddenbrooks* unterhält. Um diese Beziehung zu erläutern, werden im vorliegenden Aufsatz die Figur Thomas Buddenbrooks und Friedrich Nietzsches als Typus des ‚Leistungsethikers‘ untersucht.

Manfred Dierks schreibt, dass sich um die Jahrhundertwende eine Neigung verstärkt, die chaotische Situation der verschiedenen Gedanken und Schulen zu ordnen. Bei Thomas Mann lässt sich auch eine Neigung zu Typisierungen, z. B. an dem Rollenspiel des Prinzen in seiner Kinderzeit oder dem Prinz in der *Königliche Hoheit* beobachten.

Thomas Mann nennt als Typ des ‚Leistungsethikers‘ nicht nur Thomas Buddenbrook, sondern auch mehrere weitere Figuren in seinen Werken, wie Aschenbach in *Der Tod in Venedig* und Leverkühn im *Doktor Faustus* sowie den Philosophen Friedrich Nietzsche.

Die ‚Leistungsethiker‘ sind im *Tod in Venedig* als Menschen beschrieben, „die am Rande der Erschöpfung arbeiten, die Überbürdeten, schon Aufgeriebenen, sich noch Aufrechthaltenden, all dieser Moralisten der Leistung, die, schmächtig von Wuchs und spröde von Mitteln, durch Willensverzückung und kluge Verwaltung sich wenigstens eine Zeitlang die Wirkungen der Größe abgewinnen“.

Diese Charakteristika sind auch für Thomas Buddenbrook sowie Friedrich Nietzsche bezeichnend. Auf beide treffen nicht nur diese allgemeinen Merkmale des ‚Leistungsethikers‘ zu, sondern es korrespondieren dazu auch entsprechende biographische Ereignisse bzw. literarische Beschreibungen. Beide haben besondere Erlebnisse durch die Lektüre der Werke Schopenhauers und durch die Erfahrung des Wirbelns. Thomas Buddenbrook stürzt wirbelnd auf die Straße und stirbt, und Nietzsche kritisiert das logische Denken als ewig wirbelndes Denken aber er auch denkt im endlose wirbelnden Gedanken.

Scott Abott erörtert, dass ein Entsprechungsverhältnis zwischen Passagen im *Matthäusevangelium* und der Beschreibung der Sterbeszene Thomas Buddenbrooks besteht.

Hier zeigt sich eine weitere Entsprechung von Verszeilen in der *Matthäuspassion* von Bach. Aber Thomas Buddenbrook ist nur ein Kaufmann und kein Christ, Nietzsche hingegen bezeichnet sich selbst als Gekreuzigter. Insofern ist Thomas Buddenbrook als parodistische Figur Nietzsches angelegt.

Thomas Mann versteht Nietzsche nicht wie die zeitgenössischen Künstler, die Nietzsche vor allem als Ästhetiker nachahmen wollten, sondern Nietzsche als Leistungsethiker und versucht, einen solchen Nietzsche in der Figur vom Thomas Buddenbrook auszudrücken. Dieser figurative Einfluss Nietzsches zeigt sich auch noch im *Doktor Faustus*, sodass *Die Buddenbrooks* und der *Doktor Faustus* durch Friedrich Nietzsche und den Typus des ‚Leistungsethikers‘ verbunden sind.